

令和7年度(2025年度) 小・中学校不登校に関するプロジェクト研究

## 児童生徒が安心して学び、成長できるSSRのあり方

－社会的自立を見据えた切れ目のない支援を通して－

### 内容の要約

本研究では、SSR(校内教育支援センター)が児童生徒にとって安心して学び、成長できる場となることを目指し、アセスメントに基づき、四つの要素(人とのつながり、安心できる環境づくり、周囲の理解、なりたい『私』へのステップ)を軸とした支援を行った。研究を通して、社会的自立を見据えたSSRのあり方や可能性、切れ目のない支援を意識した連携のあり方等について検討し、児童生徒理解や自己決定を促す取組、信頼関係の構築等を重視したSSR運営を行った。その結果、SSRが安心して学び、成長できる場となり、児童生徒がなりたい『私』に向けたステップを自ら踏み出すきっかけとなった。

### キーワード

人とのつながり 安心できる環境づくり 周囲の理解 なりたい『私』へのステップ  
自己決定 社会的自立 切れ目のない支援

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (4)
II	研究の目標	(1)	1 BPSモデルを活用した児童生徒のアセ スメントとプランニング (4)
III	研究の仮説	(2)	2 四つの要素に関する支援 (5)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	3 小・中学校における切れ目のない支援 を意識した連携 (8)
1	研究の体制と方針について	(2)	4 児童生徒および教職員の変容(質問紙 調査) (9)
2	児童生徒のアセスメント(見立て) とプランニング(手立て)	(2)	VII 研究のまとめと今後の展望 (11)
3	安心して学び、成長するための支 援の充実	(2)	1 研究のまとめ (11)
4	小・中学校における切れ目のない 支援体制の充実	(3)	2 今後の展望 (12)
5	研究の成果と課題の分析について	(3)	文 献
V	研究の進め方	(4)	
1	研究の方法	(4)	
2	研究の経過	(4)	

# 社会的自立を見据えた 安心して学び、成長できるSSRのあり方



## アセスメントとプランニングに基づく4つの要素を軸とした支援

### SSR(スペシャルサポートルーム)とは

校内教育支援センターのことで、学校には行けるけれど自分のクラスには入れない時や、少し気持ちを落ち着かせてリラックスしたい時に利用できる部屋のことです。



しがの学びと居場所の保障プラン  
～安心して学び育つための、不登校の状態にある子ども支援～



## 小・中学校不登校に関するプロジェクト研究

## 児童生徒が安心して学び、成長できるSSRのあり方

－社会的自立を見据えた切れ目のない支援を通して－

## I 主 題 設 定 の 理 由

不登校の課題に対しては、これまでも学校現場等において様々な努力がなされ、児童生徒の社会的自立に向けた支援が行われてきたが、不登校児童生徒数は依然として高水準で推移しており、生徒指導上の喫緊の課題となっている。このことに関わって、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)」(文部科学省、令和5年3月)が策定された。その中で、不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える取組の一つとして、校内教育支援センター(スペシャルサポートルーム等)(以下、SSRという。)の設置が掲げられ、取組が進められている。本県の「しがの学びと居場所の保障プラン～安心して学び育つための、不登校の状態にある子ども支援～」(滋賀県、令和7年3月改定)(以下、「しがの学びと居場所の保障プラン」という。)の基本理念においても、「安心して成長できる居場所をつくる」<sup>1)</sup>ことが述べられている。

さらに、「生徒指導提要」(文部科学省、令和4年12月)では、異なる校種間の連携について、「支援ニーズや支援内容についての情報を異なる校種間で丁寧に共有し、必要なことは引き継ぐ実効的なシステムを築くことが必要」および「校種間の移行期は、不登校児童生徒への支援においてもきわめて重要」<sup>2)</sup>と述べられており、不登校の課題解決においても校種を越えて連携を図ることが重視されている。本県でも、「しがの学びと居場所の保障プラン」の「不登校の現状と課題」の項において、「不登校の状態にある子どもの数は年々増加し、(中略)特に、小学1年生、中学1年生の増加率が高い」<sup>1)</sup>ことが課題として挙げられている。このことから、校種間の接続を意識した不登校支援を行うことが重要であり、切れ目のない組織的な支援を行う体制づくりが求められる。

また、「生徒指導提要」では、生徒指導とキャリア教育との密接な関係についても示されており、生徒指導の基礎として、「日頃から児童生徒の社会的自立に向けた支援を行うことはもとより、生涯を見通したキャリア教育や適切な進路指導を行うことも大切」<sup>2)</sup>と述べられている。このことから児童生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるような支援が求められているといえる。

以上のことから、本研究では、当センターで行った令和6年度小学校不登校に関するプロジェクト研究において、支援の軸として挙げた「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素に、学びの機会の確保やキャリア教育、進路指導等の支援に向けた「なりたい『私』へのステップ」の要素を加え、小・中学校のSSRにおける児童生徒の社会的自立を見据えた支援のあり方を探る。そして、校種間やSC(スクールカウンセラー)、SSW(スクールソーシャルワーカー)、校外教育支援センター等の多職種・関係機関との連携など、切れ目のない支援の充実を図ることによって、SSRが児童生徒が安心して学び、成長できる場となることを目指す。

## II 研 究 の 目 標

小・中学校において、アセスメントとプランニングに基づき、「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」「なりたい『私』へのステップ」の四つの要素を軸にした、社会的自立を見据えた切れ目のない支援の充実を図り、児童生徒が安心して学び、成長できるSSRのあり方を示す。

### Ⅲ 研究の仮説

小・中学校のSSRにおいて、児童生徒のアセスメントとプランニングを基に、四つの要素を軸にした社会的自立を見据えた切れ目のない支援を充実させることができれば、児童生徒にとってSSRが安心して学び、成長できる場となるだろう。

### Ⅳ 研究についての基本的な考え方

#### 1 研究の体制と方針について

本研究は、「令和7年度生きる力を育むモデル校『スペシャルサポートルーム(SSR)』推進事業」と連携し、同一中学校区内で指定を受けた小・中学校より5校(以下、実践校という。)の協力を得て、当センター、実践校および市町の校外教育支援センターを会場に、全5回のプロジェクト研究会を行う。各校のSSRや市の教育支援センターを見学したり、研究会等で研究委員<sup>1)</sup>が具体的な支援について学んだりして、各実践校の取組に生かすことにつなげる。また、研究委員同士が学校や校種を越え、積極的に情報交換を行い、各校のSSRのよりよい運営方法を探る。

#### 2 児童生徒のアセスメント(見立て)とプランニング(手立て)

「生徒指導提要」で述べられているとおり、不登校は、その要因や背景が多様・複雑であることから、適切にアセスメントを行い、支援の方向性を揃えることが求められている。そして、Bio(生物学的要因)、Psycho(心理学的要因)、Social(社会的要因)の三つの観点(以下、「BPSモデル」という。)から、多面的なアセスメントを行うことが大切である(図1)。さらに、アセスメントに基

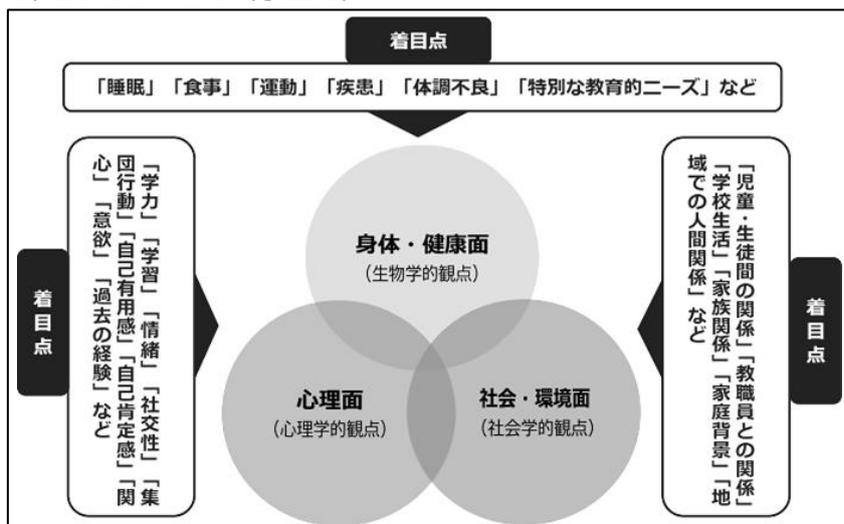


図1 BPSモデルの着目点解説(東京都教育委員会「児童・生徒を支援するためのガイドブック<sup>3)</sup>」より)

づく児童生徒自身のよさや可能性等の強みを生かしたプランニングを行う必要がある。そこで各実践校において、アセスメントシート等を活用し、必要に応じてSCやSSW、校外教育支援センター等の多職種・関係機関と連携して、アセスメントとプランニングを行い、チーム学校としての支援につなげる。SSRを利用する児童生徒の現状や変容、保護者の思いについては、面談やケース会議、教職員が児童生徒と共に活動する中での観察等で把握する。

#### 3 安心して学び、成長するための支援の充実

##### (1) 「人とのつながり」に関する支援

SSRを利用する児童生徒にとっても、社会の一員として他者と関わり、信頼関係を構築する力を育むことが必要である。そこで教職員は、令和6年度の研究で活用した、児童生徒がSSRでの過ごし方

<sup>1)</sup> 滋賀県教育委員会が「令和7年度生きる力を育むモデル校『スペシャルサポートルーム(SSR)』推進事業」にて加配した教員に対し、滋賀県総合教育センターより本研究の研究協力の依頼を行った者。

や様子を記録する「今日のわたしノート」(図2)等で、日々のやり取りを行い、児童生徒理解につなげる。これによって、児童生徒の体調や気持ち等を把握するとともに、コミュニケーションを図り、つながりを強める。他にも、児童生徒同士や教職員と交流する活動や対人関係等のコミュニケーション能力を育成する取組を行い、自己理解・他者理解を促す。

今日のわたしノート	
____年 ____組 名前 _____	
月	日 ( ) 曜日 時 分
・就寝時刻 _____	・起床時刻 _____
・すぐに眠れましたか? ( はい いいえ )	・途中で起きましたか? ( はい いいえ )
・よく眠れましたか? ( 寝た ・ 普通 ・ 寝ていない )	・寝ているときに、夢を ( みた ・ みていない )
・今の気持ちを教えてください。	
😊 😊 😐 😐 😞	
今の気持ちを教えてください。	
😊 😊 😐 😐 😞	
帰る時	今日の振り返りや今の気持ちを書きましょう。
	_____

図2 「今日のわたしノート」の例

## (2) 「安心できる環境づくり」に関する支援

SSRが誰もが安心できる環境になるよう、児童生徒一人一人の状況や思いに応じた学びを進められる環境づくりを行うことが必要である。また、児童生徒が学級とのつながりや所属感を感じられるよう、環境を整えることも重要である。そこで安心できる環境づくりに向け、実践校の実情に応じて、学びの空間や掲示物、児童生徒への連絡方法を工夫する。また、学級の予定と照らし合わせ、児童生徒が教職員と相談しながら、その日の過ごし方を自己決定できるような環境づくりを行う。

## (3) 「周囲の理解」に関する支援

児童生徒が学校への安心感をもつためには、教職員や保護者、他の児童生徒のSSRに対する理解が深まり、温かい雰囲気迎え入れられることが必要である。そこで、適切に支援するために、校内でSSRを利用する児童生徒の現状やSSR運営について共通理解を図り、チームとして支援が行えるよう意識の向上につなげる。そして、教職員だけでなく、全校の児童生徒・保護者への説明や情報発信等を行うことによって、SSRに対する理解を深めていけるようにする。

## (4) 「なりたい『私』へのステップ」に関する支援

児童生徒が社会的自立を目指すうえで、主体的に自分の興味・関心について考え、目標や進路を自己決定しようとする姿勢や力を養うことが重要だと考える。その中で、児童生徒が学校への安心感を持ちつつ、卒業後を見据えた目標設定や進路選択をするためには、児童生徒に寄り添った学習支援や進路実現に向けた相談が必要である。そこで、児童生徒の自己理解、自己決定を促す過程で、ICTを活用した多様な学習支援を行ったり、発達段階や児童生徒の希望、心の状態に合わせた目標設定を支援したりする。また、児童生徒を中心に据え、保護者を含めた全ての関係者で情報共有等を行い支援を進めることで、なりたい『私』に向けたステップを自ら踏み出せるようにする。

## 4 小・中学校における切れ目のない支援体制の充実

「校種間の移行期は、不登校児童生徒への支援においてもきわめて重要」<sup>2)</sup>と述べられているとおり、小・中学校における接続を意識した切れ目のない支援体制の充実を図ることが必要である。そこで同一中学校区内の教職員による参観や情報共有等を行い、多様な学習支援やキャリア教育、進路指導・相談等について、小・中学校における切れ目のない支援体制および小中連携のあり方を探る。また、個別の支援策について様々な視点から協議する過程で、SCやSSW、校外教育支援センターなどの多職種・関係機関との連携のあり方について検討する。

## 5 研究の成果と課題の分析について

児童生徒のSSRでの成長や変容、教職員のSSRに関する意識の変容について見取り、分析する。児童生徒の成長や変容については、児童生徒自身が記録した「今日のわたしノート」等や、教職員の対話

や観察等による見取り、質問紙調査の内容から分析する。教職員の意識の変容については、研究の始期と終期における教職員質問紙調査の内容を分析する。これらを踏まえ、小・中学校における児童生徒が安心して学び、成長できるSSRのあり方について、成果と課題の検証をする。

## V 研究の進め方

### 1 研究の方法

- (1) 実践校の管理職や研究委員等と研究の方向性、内容について共通理解を図る。
- (2) 研究委員はプロジェクト研究会での学びと自校での実践の往還を進め、児童生徒が安心して学び、成長できるSSR運営を行う。そして、児童生徒の姿を把握し、取組を通して児童生徒の変容を見取る。
- (3) 実践校の管理職や研究委員等と、実践校の児童生徒の実態や課題、ニーズについて共有し、本研究の重点となる四つの要素に関するよりよい支援のあり方を検討する。
- (4) トータルアドバイザーや専門委員の助言を受けたり、SCやSSW、校外教育支援センターなどの多職種・関係機関との連携を適宜図ったりすることで、支援のあり方を検討する。
- (5) 研究の始期と終期に、実践校の教職員に質問紙調査を行い、SSR運営や不登校支援の成果と課題を検証する。また、終期にSSRを利用する児童生徒に質問紙調査を行い、取組の成果と課題を検証する。
- (6) 実践校の取組事例や支援の要点をまとめたリーフレットを作成する。

### 2 研究の経過

5月	教職員質問紙調査(始期)の実施と分析	9月～11月	各実践校のSSRに研究員が訪問
6～8月	各実践校のSSRに研究員が訪問	10月	第4回研究会(実践交流)
6月	第1回研究会(研究の目標と方法の共有、今後の計画など)	10月～11月	教職員・児童生徒質問紙調査(終期)の実施と分析
7月	第2回研究会(実践交流、取組状況、課題に関する情報共有)	11月	第5回研究会(成果と課題についてのまとめ)
8月	第3回研究会(実践交流、検証、2学期以降の取組計画の修正)	2月	研究発表大会

## VI 研究の内容とその成果

### 1 BPSモデルを活用した児童生徒のアセスメントとプランニング

A校では、弱みだけでなく強みを見つけ、生かすことを目指し、BPSモデルの要素を取り入れたアセスメントシート(図3)を活用した。生徒の多面的なアセスメントを通じて実態を把握し、強みを生かしたプランニングを行うとともに、支援方法の共有を図った。実際に、SSRでの学習や集中力に課題があった生徒に、生徒が得意で好きなパズルやオセロ等の媒介物を活用した支援を行ったところ、他の生徒や教職員との関わりや会話が増え、落ち着いて学習ができるようになり、自ら教科の学習に向かう姿も見られるようになった。また継続的に支援を行うために、月1回程度アセスメントとプランニングを見直し、必要に応じて小学校から引き継いだ児童指導要録の写し等を読み返すなどして、支援方法の改善・更新を図った。

**自尊感情を高めましょう！表**

年 組 氏名 ( )

---

この生徒のアセスメント(見立て・背景)

【身体・健康面 (Biological)】  
欠席は、1学期は1日(腹痛)。  
体調を崩すことは少ない。給食等も残さず食べている様子。

**部活動に関する内容**

■体調面、健康面はあまり心配いらぬのかな？

【心理面 (Psychological)】

**学習や成績、授業中の反応や態度に関する内容**

成績は本人曰く、「意外とよかった」「もっと悪いと思っていた」

【社会・環境面 Social】

**家庭環境、家庭背景、兄弟・姉妹に関わる内容**

仲がいい子が多いわけではないが、班活動などで仲間と関わることはできる。  
家では、スマホを触っていることが多いとのこと。(懇談にて)  
1学期は、ベル音を頑張った。

**生徒指導や生徒間トラブルに関する内容**

■もっと自分を見て欲しい？認めて欲しい？

なので・・・

---

【こんな取り組み・言葉かけをしていってみよう】  
学級通信の写真や文章の登場回数を、増やしてみようかな。  
生活の記録に、頑張りを認めるようなコメントを書くことを増やしてみようかな。  
 自尊感情を高める

仲間とのつながりをもっと深められたら・・・  
休み時間自分の席で過ごすことが多いので、近くに座っている子を巻き込んで話す。  
新しい班になっても馴染みやすいように、レクや班活動を多く行って・・・  
 安心して自分を出せる環境をつくる

図3 A校で活用したアセスメントシート(太枠内は筆者)

BPSモデルの要素を取り入れた多面的なアセスメントは、生徒の実態に即した支援につなげることができる。また、生徒の強みに注目し、教職員が共通理解のもと支援を行うことは、生徒の自尊感情や自己肯定感の高まりにつながると考える。

## 2 四つの要素に関する支援

### (1) 「人とのつながり」に関する取組

#### ア 生徒理解につながる「今日のスケジュール」の活用

B校では、一人一人の思いに寄り添い、関係づくりと生徒理解につなげるため、生徒が自分の状態や予定を記録する「今日のスケジュール」(図4)を活用した。グラフと感情が分かる表情のマークを使用し可視化したことで、生徒は自分の状態について考えるようになり、教職員は、うまく言語化して説明できない生徒の内面的な変化に気付くことができた。また、担任や他の教職員が生徒の振り返りにコメントをすることによって、教職員ともつながり、信頼関係を構築することができた。当初は教職員の質問に頷く程度の反応だった生徒が、「今日のスケジュール」でのやり取りや個別の面談を続ける中で、SSRの机の配置に関する悩み事を相談し、実際に机の向きや配置を変えることにつながった事例もあった。

クラスの時間割	私の時間割			振り返り
	教科	内容	場所	
1	社会	テスト	学習室	5-3-2-1

振り返り  
退室時に1日の振り返りを記入し、担任等が返事を記入。  
今日はテスト最終日でした。テスト期間を過ぎて最高です。教員のテストはじこくでした。2日間お休みが作業/よく頑張りました。また明日から(頑張っています)!!

図4 B校で活用した「今日のスケジュール」(吹き出しは筆者)

当初は教職員の質問に頷く程度の反応だった生徒が、「今日のスケジュール」でのやり取りや個別の面談を続ける中で、SSRの机の配置に関する悩み事を相談し、実際に机の向きや配置を変えることにつながった事例もあった。

生徒の入室時と退室時の状態の変化を継続的に見取ることやコメントでのやり取りをすることは、生徒の変化や興味・関心、思い等に気付くきっかけとなり、生徒理解につながると考える。

#### イ 季節のイベントを活用した交流

B校とC校では、生徒同士や生徒と教職員がつながる機会をつくることを目指し、季節のイベントとして七夕の短冊飾りを行った。短冊にはSSRを利用する生徒と教職員が願い事を記入した。笹に飾る作業も生徒と教職員が協力することによって、短冊を見ながら微笑む姿や短冊を介して話をする姿が見られた(図5)。



図5 B校の七夕の短冊飾りの様子

取り組む生徒の姿や「願いが叶うかもしれないと思えた」「いろんな人の願いを見るのが楽しかった」という生徒の感想から、季節のイベントを活用した交流が、希望や憧れを抱く喜びや、人とつながる楽しさを実感する機会となっていたようである。このような場を継続的に設定していくことは、自己理解を促すとともに、他者とつながろうとする気持ちを育むことにつながっていくと考える。

#### ウ 自己表現カードの活用

A校では、自己表現が苦手な生徒への支援と言葉かけのタイミングや内容が重要と考え、今の自分の状態をイラストで表現するツール「自己表現カード」(図6)を活用した。生徒は自分の今の状態に合わせ、必要に応じて複数のカードから1枚のカードを机の上に表示し、学習に集中するため、声をかけないよう周りに伝えたり、他者にSOSを求めたりしている姿が見られた。そして教職員が生徒の自己表現を受け入れ、支援を続けた結



図6 A校で活用した自己表現カード(吹き出しは筆者)

果、カードを使わずに自分の思いや気持ちを相手に伝えられるようになっていった。

自己表現が苦手な生徒でも、今の自分の状態に合わせてカードを提示するだけでよいため、安心して自己表現することができた。その後、カードなしで自己表現ができた姿からは、それを受け入れてくれる周りの存在にも気付くことができたと推察される。自分の今の状態を理解し、他者に伝えることで、更なる自己理解・他者理解につながっていくと考える。

(2) 「安心できる環境づくり」に関する取組

ア 学びの空間と環境づくりの工夫

C校では、生徒の自分のペースで静かに学習したいという思いに寄り添うため、パーテーションを使い個別スペース(図7)を設置した。普段は協働スペースにいる生徒も、一人で学習する時やオンライン授業を受ける際には、個別スペースを活用し、自分の学びたい環境を自己決定する姿が見られた。またSSRで電子オルガンを弾いていたある生徒が、別の生徒が個別スペースに入ったのを確認すると音量を下げ、会話はなくとも互いの存在を大切にしよう姿も見られるようになった。またSSRで上級生の学習に取り組む姿勢や進路に関する情報を見聞きする中で、少しずつ学習態度に変化が見られ、教科のワークやプリント等の課題を全て提出できるようになった生徒もいた。



図7 C校における学びの空間の工夫

学びの空間を工夫することで、部屋の利用に関する共通認識ができ、お互いが安心して過ごし、学習するための環境を自分たちでつくるという意識の向上が生まれる。さらに、異学年が同じ空間で学ぶことが先の学年の自分を想像し、見通しをもつことにつながっていくと考えられる。

イ 学級や学年の様子、学習内容を伝える取組

C校では、SSRを利用する生徒が学級や教職員とのつながりを感じられるよう、また教職員と生徒が関わるきっかけとなるよう連絡用ホワイトボード(図8)を活用した。ホワイトボードには、各学年、各教科、総合的な学習の時間の授業内容や取組内容、SSRで取り組めること、担当教員からのメッセージ、提出物、予定等が書かれており、生徒が自ら確認できるようにした。単元や内容が変わる度に、担任や担当教員が直接SSRに書きに来るようになったため、生徒との交流やつながりを維持する機会になった。内容が更新されたことを確認し、付箋にメモを取る生徒の姿があった。また教員の書き込みに対して、コメントやユーモアを交えた内容を書き込み、コミュニケーションのきっかけをつくるなど、双方向でのやりとりを楽しむ姿が見られた。

	授業でコレをしています	SSRで取り組めること	オススメ授業・お知らせ
音楽	1年 魔王についてプリントを書き写す 学習しています 2年 交響曲第5番(運命)の学習をしています 3年 合唱コンクール(7月活動)	ワーク、プリント ↑ ワーク、プリント	昔(1996.97)見返さず 魔王と踊りたいわい 全てもってきてください!
美術	1年 自分の中の妖怪 2年 校内検定(ピクトグラム) 3年 卒業記念品づくり	租書、ワークシート、模範解答全て ロイロで送ってあります。見返しが取 り組んでね。 デザインから研究までSSRで作れるよ	粘土で妖怪を作ってます! ペーパーポイントを使っているよ! お気に入り、自分だけの作品を作ろう
保健	1年 マット運動 2年 持久走 3年 ダンス	保健手帳とか マット運動調理学習 走、こ体力をつける 保健手帳とか、ダンスの練習!	また見学において 走、こ健康にしよう!! ダンス発表会(15(金)見において)
技術	1年 木彫加工の実習 2年 ラジオ製作 はんだ付け 3年 プログラミング	のこぎり、イソトレインア はんだ付け、イメージトレーニング タイピング練習	
家庭	1年 衣生活、布と使え物作り 2年 食品の選択について 3年 消費生活	ワーク - タブレットケースの製作 ワーク ワーク	1月 新年度準備スタート! (9月15日) 2月 12月に百歳理髪部 (10月15日/16日) 3月 フェルトで作ろう!

図8 C校で活用した連絡用ホワイトボード

る度に、担任や担当教員が直接SSRに書きに来るようになったため、生徒との交流やつながりを維持する機会になった。内容が更新されたことを確認し、付箋にメモを取る生徒の姿があった。また教員の書き込みに対して、コメントやユーモアを交えた内容を書き込み、コミュニケーションのきっかけをつくるなど、双方向でのやりとりを楽しむ姿が見られた。

SSRを利用する生徒は、ホワイトボードがあることによって、SSRにいながら一日の見通しをもてることによる安心感やクラスの一人としての所属感、学級とのつながりを感じることができ。さらに、時間割とホワイトボードを活用することによって、その日の過ごし方を自己決定す

ることができ、SSRがより安心できる居場所となっている。また、ホワイトボードに書きに来た教職員とつながる機会となるため、教職員との信頼関係の構築にもつながると考える。

### (3) 「周囲の理解」に関する取組

#### ア 教職員への周知

D校では、教職員のSSRに関する知識と理解を深めるため、学校の実情に合わせた研修資料を作成し、教職員研修を実施した。研修では、SSR設置につながる国や県の施策や法律、SSRの定義および別室との違い、社会的自立に向けたSSRでの支援や取組の事例等について学びを深めた。その後の協議では、明日からできるSSRの児童への支援について話し合い、「子どもが自己決定するためには、自己理解を深めるための支援が必要」「社会的自立を目指すためには、教師も認識をアップデートする必要がある」などの意見が出た。従来の別室による学習支援を中心とした支援だけでなく、不登校支援をチーム学校で行うことや児童の思いや自己決定に寄り添う支援の重要性について改めて認識する機会となった。

#### イ 全校生徒・保護者への情報発信

A校では、全校生徒や保護者のSSRに対する理解を深めるため、年度初めにSSRについての保護者向けの案内文書を発行し、SSRの意義や取組、担当者などについて情報発信を行った。そして、教育相談に関する通信を毎月発行し、SSRの紹介やSCとSSWの面談可能日等の周知を継続して行った。また、SSRの利用を開始する前には、基本的な約束や利用時の具体的な流れを提示し、生徒・保護者がSSR利用時の見通しをもてるようにした。

SSRの本来の目的から外れた利用にならないよう留意する必要があるが、SSRの意義や取組を継続的に発信することにより、周囲のSSRへの理解が深まる。そして、居場所や学びの場の選択肢が広がることは、児童生徒や保護者の安心感につながると考える。

### (4) 「なりたい『私』へのステップ」に関する取組

#### ア 自己理解のための取組

A校では、自己理解とキャリア形成、将来の自分のイメージを膨らませることを目指し、「『私』のイメージマップ」(図9)を活用し、生徒のキャリア教育、進路相談を行った。SSRを利用する生徒にとって進路の話をすることや進路について考えることは大きな負担になりかねない。また、登校のペースを崩してしまう可能性も考えられる。そこで、「『私』のイメージマップ」に取り組むき

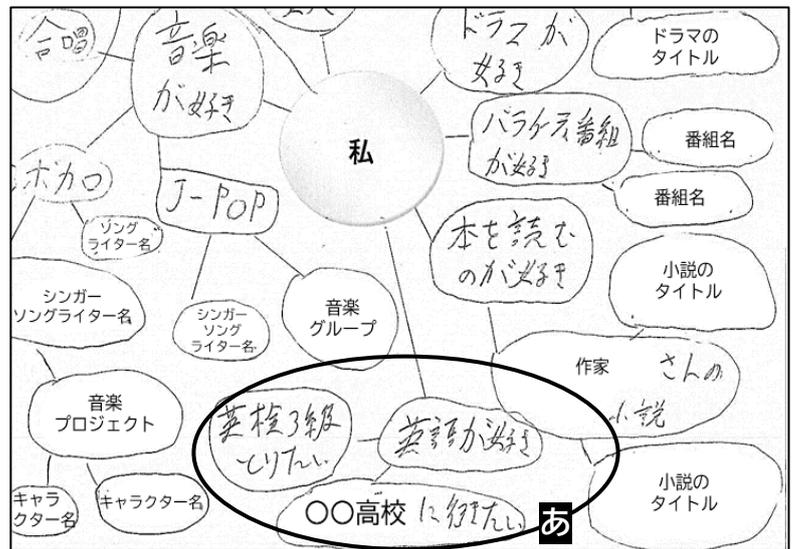


図9 生徒が書いた「『私』のイメージマップ」(囲み線あは筆者)

っかけづくりとして、教職員が自分のイメージマップを作成し、好きなことや得意なことだけでなく、苦手なことや嫌いなことについても記入した。そのイメージマップをSSRに掲示しておく、興味を示し読んでいた生徒や「これはどの先生の書いたマップなん」と聞いてくる生徒がいた。そして反応を示した生徒の中には、実際に自分でイメージマップの作成に取り組み、自分と向き合う姿が見られた。また、生徒の書いたイメージマップを見ながら、教職員が自身の経験や

学生時代の悩みごと等を生徒に話したことで、自分の進路や進学先について考え、書き足す生徒の姿が見られ(図9の**あ**)、その後の担任や保護者との進路相談につながった事例もあった。

教職員が自己開示し、自分の得意なことに加え、苦手なことを記入し弱みを受け入れる姿を見せたことで、生徒にも変化が見られ、避けていた進路についても少しずつ話をしてみようと思えたものと考えられる。「『私』のイメージマップ」を活用し、自分の好きなことや得意なこと、また苦手なことに注目し、目標が明確になることで、社会的自立を見据えた自分なりの一歩を踏み出すことにつながると考える。

#### イ 協働で行う学習や活動「オアシスタイム」の取組

D校では、SSRを利用する児童に協力することの楽しさや達成感を味わってほしいと考え、個別の学習に加え、協働で行う学習や活動の時間「オアシスタイム」を設定した。その時間の内容は、児童と教職員が相談して決めたり、児童の得意を生かした活動を行ったりした。文字を1画ずつ交代で書き上げるリレー書道の活動では、低学年の児童の筆遣いに合わせ、さりげなくサポートする上級生の姿があり、作品ができあがった時には自然と拍手が起こった。片付けの際も率先して行い、丁寧に教える上級生の姿があった。

このように学習や活動を協働で行うことで、他の児童と協力し、楽しさや達成感を味わったり、互いに支え合ったりする経験ができ、その経験の積み重ねが、児童の心の成長につながると考える。また、異学年と一緒に活動することで、他学年を思いやる気持ちやリーダーシップ、責任感が養われるとともに、上級生が下級生のロールモデルとなることで、なりたい『私』を考えるきっかけや数年後の自分の姿を意識した目標設定につながると考える。

#### ウ 学び方の自己決定を促す取組

A校では、一人一人に寄り添った学習支援を行うため、オンライン授業スペース(図10)を活用し、学級とSSRをつなぐオンライン授業を行った。事前に教職員や学級にオンライン授業に関する共通理解を図り、SSRを利用する生徒に授業内容や準備物等を伝えた。オンライン授業を続けたことをきっかけにして、教室で授業を受けることを決めた生徒もいた。また、「早退以外の選択肢ができた」ため、「今日は心の充電のためにSSRで過ごす」と自分の心身の状態に合わせて自己決定できるようになった生徒もいた。



図10 A校のオンライン授業スペース

教室での授業だけでなく、オンラインによる学級とのつながりや学び方の選択肢が増えることは、生徒の安心感や学習意欲につながると考える。また教職員が、生徒のなりたい『私』や進路に向けて挑戦しようとする姿勢、「今は心の充電にあてる」と決めた気持ちに寄り添い認めることが、生徒の自己肯定感の高まりや社会的自立に向けた一歩につながっていくと考える。

### 3 小・中学校における切れ目のない支援を意識した連携

#### (1) 接続を意識した小中連携

##### ア 中学校区内で共通理解を図る取組

C校とE校では、中学校区内で不登校支援に関する共通理解を図り、互いの良さを生かした小中連携やSSR運営を行うことを目指し、SSR担当同士で打合せをし、同じ内容の教職員研修を行った。両校のSSR運営に関する現状と課題を共有し、研究協議と講義の内容を決定したことによって、両校とも「児童生徒とのつながりや支援、自己決定に関する新たな気づきがあった」等の意見や感想が出ていた。

小・中学校で共通理解を図り、接続を意識した支援や連携を行うことは、環境の変化に不安を抱えている児童だけでなく、全ての児童にとっての安心感につながると考える。

イ 中学校区内の教職員による参観

同じ中学校区のB校とD校では、互いのSSRの様子や運営方法を知ることに加え、直接顔を合わせることで児童の安心感につながると考え、中学校のSSR担当が小学校のSSRを訪問した。訪問では、児童の様子を参観したり、一緒に学習や活動を行ったりした。休み時間には、中学校のSSR担当に中学校での生活について質問する児童の姿があった。参観後には、SSR担当同士で互いのSSRの特徴や違いを共有し、SSRにおける接続を意識した小中連携について話し合った。

SSR担当同士の情報共有だけでなく、実際に児童と出会い交流することにより、児童は中学校にもSSRがあるという安心感や中学校生活のイメージを膨らませることができる。中学校での学びの場を決める児童や自己決定に寄り添う保護者にとって、学校の丁寧な相談とSSRの存在、小中連携が中学校進学に向けた安心材料の一つになると考える。

(2) SC、SSW等の多職種、関係機関等との連携

E校では、チーム学校として児童・保護者支援を行うことを目指し、SCやSSW、校外教育支援センターと連携し、SSRを利用する児童と保護者への支援を行った。SCが勤務する日には、SSRで児童と遊び触れ合う中で見取り、その内容をアセスメントやプランニングの見直しに役立てた。保護者に対しては、原則月1回のSSWとの面談を実施した。専門的な知見を踏まえた面談により、医療連携につながった例もあった。また、Z市の校外教育支援センターに通う児童に対しては、センターと学校の教職員が相互に参観を行い、児童のよりよい支援につながるよう連携し、協議を行った。Z市の校外教育支援センター所長は「校内外教育支援センターそれぞれの良さや可能性を生かした支援を充実させると同時に、保護者への支援も行っていきたい。社会的自立を見据え、センターも一緒に児童生徒一人一人に寄り添った小中連携のあり方を検討していきたい」と話されていた。

このように、日頃から児童生徒を真ん中におき、多職種・関係機関との連携によるチーム学校で、支援策を考えることが、指導や支援の幅と可能性を広げ、児童生徒と保護者の安心感や児童生徒の社会的自立を見据えた支援につながると考える。

4 児童生徒および教職員の変容(質問紙調査)

(1) 児童生徒の変容について

本研究では、「回答可能」と意思表示をしたSSRを利用する児童生徒23名に対して、答えたくない項目には答えなくてよいことや、途中でやめることもできることを伝え、11月に質問紙調査を実施した(図11)。3「SSRでは、安心して過ごすことができる」と5「SSRが学校にあってよかった」の項目において、肯定的な回答が9割を超える結果となった。また、「SSRのよいところ」と「SSRに行こうと思う理

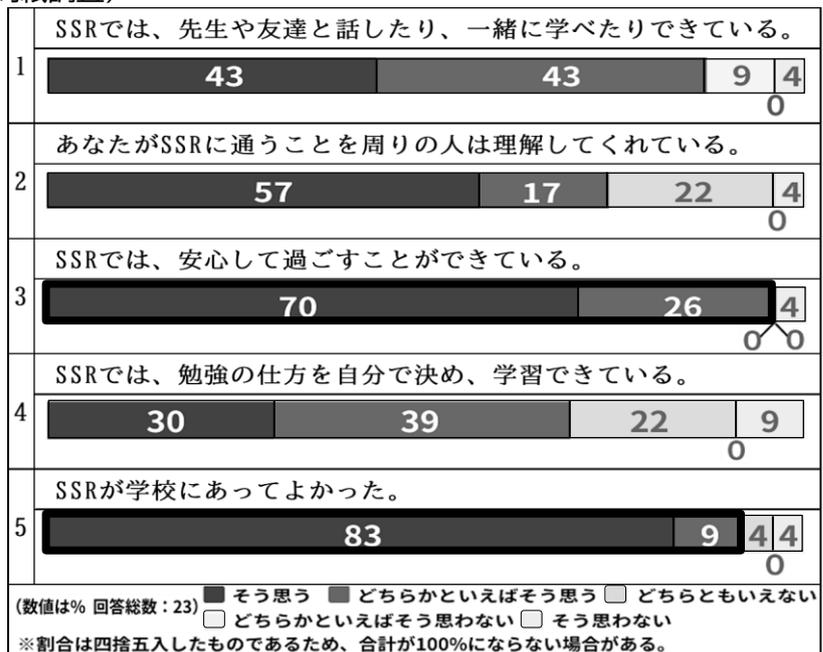


図11 児童生徒質問紙調査の結果

由」について児童生徒に尋ねた自由記述の項目では、「安心できる」「自分のペースで勉強に取り組める」等の回答があり、児童生徒がSSRを必要としていることがうかがえた(表1)。また教職員質問紙調査(終期)において、SSRを利用する児童生徒について「どのような変容が見られましたか」という自由記述の項目では、「人との関わりが増え、表現や表情も豊かになった」や「自分のペースでどんどん学習に向かうようになった」、「苦手だったことにも少しずつ挑戦できるようになった」等の回答があり、教職員がSSRを利用する児童生徒の変容を実感していることが分かった(図12)。

これらのことから、SSRの存在が児童生徒の安心感につながり、SSRが家庭と学級以外の居場所、学びの場になっていると考えられる。

表1 児童生徒質問紙調査「SSRのよいところ」「SSRに行こうと思う理由」という項目に対する自由記述の回答(一部)

SSRのよいところ	SSRに行こうと思う理由
<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心できる。</li> <li>・先生が優しく自分に合わせてくれる。</li> <li>・気持ちが沈んだ時に、話をして前向きになれる。</li> <li>・困っている時に、先生たちが相談に乗ってくれたり、助けてくれたりしてくれること。</li> <li>・少人数。</li> <li>・静かで落ち着く。</li> <li>・他の学年の子と関わることができる。</li> <li>・自分で決めることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心して過ごせる場所があったことで心に余裕を持たせることができたから。</li> <li>・安心できるから。</li> <li>・落ち着くから。</li> <li>・自分のペースで勉強に取り組めるから。</li> <li>・遅れて登校したり、早退する時に周りの目が気になるから。</li> <li>・早退以外の選択肢ができたから。</li> <li>・教室がしんどいから。学校がしんどいから。</li> <li>・人が多くザワザワした所が苦手だから。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・人との関わりが増え、表現や表情も豊かになった。</li> <li>・表情が柔らかくなった。</li> <li>・笑顔で話をするが増えた。</li> <li>・複数の教師と関わり、会話をする姿が見られた。</li> <li>・居場所ができて登校が増えたと思う。</li> <li>・自分のペースでどんどん学習に向かうようになった。</li> <li>・落ち着いて学習をする生徒の姿が見られた。</li> <li>・自分の抱えている不安を自分の口から発することができるようになってきているように感じる。</li> <li>・SSRを利用することで、気持ちを整理する時間が取れ、自分の将来を前向きに考えられるようになった。ICTを用いたオンライン授業にも慣れている様子が見られた。</li> <li>・登校が安定し、教室に行ける児童が増えた。苦手だったことにも少しずつ挑戦できるようになった。SSR内では自分らしさを出せるようになった。</li> <li>・自分の気持ちを選択して、授業参加を決めたり、もう1つの居場所としての心のゆとりが見られたりした。</li> <li>・SSRで安心して学習したことで、自学級で過ごす時間も増えた。</li> </ul>
--

図12 教職員質問紙調査(終期)の「どのような変容が見られましたか」という項目に対する自由記述の回答(一部)

## (2) 教職員の変容について

教職員の不登校の予防に対する意識等を測る尺度<sup>4)</sup>を一部改変し、研究の始期(6月)と終期(11月)に質問紙調査を行い、比較可能な86件の回答から意識の変容等を分析した<sup>1)</sup>。回答を「そう思う」を5点、「どちらかといえばそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化し、平均得点を算出した。そこから、始期の平均得点を基準に、平均より高いグループを高群、低いグループを低群に分けて比較した結果(表2)、生徒に関わろうとする意識を測る「かかわり意識」の得点が、高群で有意に下がり、低群で有意に上がった。このことにより、「かかわり意識」の高群と低群の差が、始期の0.95から終期の0.47へと縮まった。高群と低群の得点の変化について、回帰効果<sup>ii)</sup>とも考えられるが、

<sup>1)</sup> 分析は、清水裕士氏が開発した統計分析ソフトHAD<sup>5)</sup>を利用した。

<sup>ii)</sup> 極端に高い、もしくは低い値が出た場合、次の測定では、その値が平均に近づく傾向があること。

C校の研究委員からは「教職員のSSRや不登校支援に対する意識の基準が上がり、さらによい関わりを求めるようになったと思う」と教職員の意識の向上に関する意見が聞かれた。また、教職員質問紙調査(終期)において、「今年度のSSRの取組を通じた新たな気づき」に関する自由記述の項目では、「SSRを学校全体で取り組む必要性を感じた」や「SSRが児童生徒の居場所になっている」等の回答があり、学校全体の共通理解のもとチームで行うSSR運営や、不登校支援の意義と必要性を感じている様子がうかがえた(図13)。

各校の研究委員は、当初から不登校支援における共通理解の重要性を感じており、教職員への研修や情報発信、チームとして不登校支援を行うことに力を入れてきた。その取組がSSR運営および不登校支援に対する意識の向上と差の縮まりにつながったと考えられる。

表2 「かかわり意識」の高群と低群における平均値の比較 (n=86)

	始期	終期	t	p	効果量	
かかわり意識	高群(n=33)	4.60	4.34	2.49	.02*	0.52
	低群(n=53)	3.65	3.87	2.22	.03*	0.42
	高群、低群の差	0.95	0.47			

※ t: 検定統計量、p: 有意確率

\*p<.05、\*\*p<.01

- ・SSRを学校全体で取り組む必要性を感じた。
- ・SSRを利用する児童の担任だけに業務が偏ったり、SSR担当の先生に業務が偏ってしまったり、児童との関わりができていないという気づきがあった。
- ・担当者だけでなく、学校全体でSSRに関わることが必要であるし、様々な教員がSSRの生徒に関わることで、子どもたちにとって社会が広がるので大切だと思う。
- ・改めて不登校の課題について、組織的に取組を進めていかなければならないと感じた。一つの答えが出るまでに、時間もかかり、大変なこともあるが、焦らず、丁寧に取り組んでいかなければならないと改めて思った。
- ・SSRの存在が生徒の居場所になっており、個々の将来の進路に向けて自分のペースで学習を進められる場所になっている。また、担任や教科担当の教員がSSR利用生徒の状況を共通理解し、課題の提出や評価のあり方についての認識を深めることができた。
- ・SSRを拠点として生活することで、何とか教室に戻そう、戻る時間を増やそうと今まで考えていたが、その考えが子どもをさらに追い詰めてしまっていたと思った。
- ・定期的なアセスメントや支援方法の見直しをすること。情報共有はできているが、SSR利用者の今後の方向性などの話し合いまではできていない。
- ・将来を見越して、長期的な目標を立て対応しなければならぬと思った。

図13 教職員質問紙調査(終期)の「どのような気づきがありましたか」という項目に対する自由記述の回答(一部)

## Ⅶ 研究のまとめと今後の展望

### 1 研究のまとめ

- (1) 児童生徒の社会的自立を見据えた四つの要素を軸にした支援を充実させることで、SSRが安心して学べる場となった。さらに児童生徒の自己理解や他者理解が深まり、他の児童生徒や教職員との信頼関係の構築につながった。
- (2) 児童生徒の自己決定を促し、周りが寄り添い支援したことや異学年との交流により、児童生徒の自己肯定感が高まり、SSRでの活動が児童生徒にとって、なりたい『私』に向けたステップを自ら踏み出すきっかけの一つになった。
- (3) 小・中学校における接続を意識した支援や多職種・関係機関との連携を行い、切れ目ない支援の幅や可能性を広げたことで、社会的自立を見据えたSSRのあり方を示すことができた。

## 2 今後の展望

- (1) SSRを、更に安心して学び、成長できる場とするために、校内体制や研修体制を確立し、児童生徒の強みや可能性を支える支援を一層充実させることや教職員の意識の更なる向上が必要である。
- (2) SSRを利用する児童生徒が、SSRをより安心して学べる場とするためのルールや方法、人と交流する取組を主体的に考えられる環境を整え、社会的自立を目指した支援をより一層充実させることが求められる。

## 文 献

- 1)滋賀県「しがの学びと居場所の保障プラン～安心して学び育つための、不登校の状態にある子ども支援～」、令和7年(2025年)改定
  - 2)文部科学省「生徒指導提要」、令和4年(2022年)
  - 3)東京都教育委員会「児童・生徒を支援するためのガイドブック～不登校への適切な対応に向けて～」、平成30年(2018年)
  - 4)原口政明「不登校の予防に関する教師に対する意識調査2 ―不登校生徒数の減少を目指して―」『埼玉純真短期大学研究論文集第16号』、pp. 55-67、令和5年(2023年)
  - 5)清水裕士「フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』第1巻、平成28年(2016年)
- 文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)」、令和5年(2023年)

### トータルアドバイザー

立命館大学大学院教職研究科教授 伊田 勝憲

### 専 門 委 員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課参事 北村 将

滋賀県教育委員会滋賀県SSW SV 上村 文子

(スクールソーシャルワークスーパーバイザー)

### 研 究 委 員

東近江市立能登川中学校教諭 町釋 光

甲賀市立伴谷小学校教諭 寺嶋 典

甲賀市立水口中学校教諭 墨田 早貴

野洲市立野洲小学校教諭 三上 芳典

野洲市立野洲中学校教諭 大西理津子